

## 「E.FORUM スタンダード」とは何か

西岡加名恵(京都大学大学院教育学研究科・准教授)

### 1. E.FORUM スタンダードとは何か

京都大学大学院教育学研究科では、2006年度、全国からの希望者に研修を提供する E.FORUM を設立した (<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/>を参照)。E.FORUM の特徴は、一過性の研修に終わらせないよう、研修の受講者を会員として登録するとともに、研修成果を活かした実践を持ち寄って交流する機会を積極的に設けている点にある。研修や実践の成果を蓄積するため、創設と同時に「カリキュラム設計データベース (CDDDB)」を開設した。このデータベースには掲示板も併設され、大学からの情報発信や会員間の交流に役立っている。2012年度には、CDDDB の後継として「E.FORUM Online (EFO)」を開設した。このような仕組みを重視したのは、大学の知見を研修として提供するだけでなく、学校などの現場で得られた知見を集約し、そこで見つかった研究課題を共同で探究していくような研究開発ネットワークとしても、E.FORUM を機能させることを目指したことによるものである。

さて、現在、E.FORUM の研究開発ネットワークとしての機能を活かして取り組んでいるのが、プロジェクト S「スタンダード作り」である。スタンダードとは、社会的に共通理解された目標・評価基準（学力の観点と水準）を意味する。英米などの諸外国においては、スタンダードが学術的専門家集団により提案される例が見られるのに対し、日本においては、スタンダードというと国家が提示する学習指導要領がイメージされがちである。しかし、スタンダード本来の趣旨からいえば、地域やネットワークで学校現場での知見を集約して作るという方法も構想されてしかるべきである。

う。

また、スタンダードには、教えるべき内容を示す「内容スタンダード」と、教育の成果として期待される学力実態を示す「パフォーマンス・スタンダード」がある。日本においては、学習指導要領が内容スタンダードとして存在しているが、子どもたちの発達の実態に即したパフォーマンス・スタンダードの解明は課題として残されている。

このような状況認識に基づき、プロジェクト S では、E.FORUM への参加者の知見を集約して、「E.FORUM スタンダード」を作成する試みに取り組んできた。

### 2. スタンダード作りの流れ

スタンダード開発の取り組みは、具体的には次のような手順で進めてきた。

#### ① 『「スタンダード作り」基礎資料集』の作成 (2010年8月)

筆者（西岡）は、E.FORUM 設立以来、毎年、ウィギンズ (Wiggins, G.) とマクタイ (McTighe, J.) の提唱する「逆向き設計」論<sup>1</sup>を踏まえ、パフォーマンス課題を作るワークショップを提供してきた。「逆向き設計」論では、教科を貫く包括的な「本質的な問い」に対応させてパフォーマンス課題を用いることが提案されている。また、「本質的な問い」に対応する「永続的理解」を明文化することで、子どもたちに理解させたい内容の水準を明確にすることを勧めている。このような「逆向き設計」論のカリキュラム構想は、スタンダード開発を進める上で有効な枠組みを提供してくれるものである。

プロジェクト S においては、まず、パフォーマンス

ンス課題を取り入れた実践に1年以上取り組んでこられた E.FORUM 会員に寄稿をよびかけ、『基礎資料集』を作成した。

## ② 「学校教育研究フェスタ」でのシンポジウムの開催 (2010年8月、2011年8月)

次に、『基礎資料集』や CDDDB に蓄積されたデータ、学習指導要領や諸外国で開発されているスタンダードなどを踏まえつつ、各教科における重点目標を検討するシンポジウムを開催した。2010年は算数・数学(石井英真氏)、国語(八田幸恵氏)、英語(赤沢真世氏)の3教科について、2011年度はこれらの教科に加えて社会(鋒山泰弘氏)、理科(中池竜一氏)について提案を行った(左記( )内は、それぞれの教科についての取りまとめ担当者を示している)。

この成果については、雑誌『指導と評価』の連載「思考力・判断力・表現力を育てるパフォーマンス課題」(2011年10月号～2012年3月号)においても報告する機会が得られた。連載では、上記5教科について、「包括的な『本質的な問い』と対応する課題例」を整理した表を掲載した。

## ③ 教科等別分科会での検討 (2012年8月、2013年8月)

2012年度・2013年度は、各教科の議論をさらに深めるため、教科等別分科会を開催した。この時、体育、技術・家庭科の担当として北原琢也氏、音楽、美術の取りまとめ担当者として小山英恵氏に加わっていただいた。

教科等別分科会では、各担当者が各教科の包括的な「本質的な問い」と「永続的理解」、パフォーマンス課題の例を整理した表の形で、「E.FORUM スタンダード(草案)」を提案した。また、2-3名の会員による実践報告(2012年度)や、参加者による実践交流(2012・2013年度)などを行った。特に、2013年度については、「E.FORUM スタン

ダード(草案)」の拡大コピーを用意し、参加者がグループに分かれて気づきを付箋紙に書く、さらにそれらを紹介し合いながら検討をする、というワークショップ形式を取ったことで、スタンダードの検討を深めることができた。

## 3. 公開に当たって

今回公開しているのは、教科等別分科会での議論を踏まえて練り直した「E.FORUM スタンダード(第1次案)」である。作成の過程では、教科の本質や構造をどう捉えるのかといった様々な論点が顕在化しており、時には参加者の間で論争も生まれている。したがって、今回公開する「第1次案」は、あくまで今後も議論を深めるための「たたき台」だということをご理解いただきたい。

「E.FORUM スタンダード」公開の一番の目的は、あくまで実践づくりに役立つ参考資料を開発・提供することである。学校現場の先生方には、是非、ご自身の実践において、「E.FORUM スタンダード」を参考資料としてご活用いただき、お気づきの点について E.FORUM へフィードバックしていただきたい。E.FORUM では、引き続き「E.FORUM スタンダード」に改善を図る研究を続ける予定である。改善のための議論にも参加していただければ、望外の幸せである。

### 〔注〕

<sup>1</sup> ウィギンズ, G. & マクタイ, J., 西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計——「逆引き設計」の理論と方法』日本標準、2013年  
(Wiggins, G. & McTighe, J., *Understanding by Design* (Expanded 2<sup>nd</sup> Edition), ASCD, 2005)。